

論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野 氏名	病態制御科学領域 消化器内科学教育研究分野 佐竹 立
指導教授氏名	福田 眞作
論文審査担当者	主 査 中村和彦 副 査 袴田健一 副 査 加藤博之
(論文題目) Prevalence and predictive factors of irritable bowel syndrome in a community-dwelling population in Japan (本邦の一般住民における過敏性腸症候群の有病率と予測因子について)	
(論文審査の要旨) 900 字程度 住民における過敏性腸症候群 (irritable bowel syndrome: IBS) との関連要因について食生活および抑うつ症状について評価した。岩木健康増進プロジェクトに参加した平均年齢 54.4 歳の 993 人 (男性 382 人、女性 611 人) の住民を対象とし年齢・性別、喫煙などの生活習慣、既往歴、RomeⅢ基準に基づく回答を得た。食生活の評価は簡易型自記式食事歴法質問票 (BDHQ 質問票)、抑うつ症状は疫学的抑うつ尺度 (CES-D) を用いた。BDHQ で測定した 52 品目の栄養素密度に対して主成分分析を行った。IBS は男性 21 人、女性 40 人で有病率は 6.1% であった。食生活パターンの分析を行い、「健康的な食事パターン (以下 Healthy 群)」「西洋的な食事パターン (以下 Western 群)」「アルコールおよびつまみ類を多く摂取する食事パターン (以下 Alcohol 群)」の 3 因子を抽出した。Healthy 群は多くの野菜類や海藻、豆腐などの摂取が多く、Western 群では肉類の摂取が多く、alcohol 群ではビール、焼酎、イカ・タコ・エビ・貝類の摂取が多く洋菓子、米菓、もち、パン、和菓子などの摂取が少なかった。栄養素の多寡を評価すると Healthy 群では蛋白、脂質、不飽和脂肪酸、食物繊維などと正の関連があり、炭水化物、アルコールと負の関連を認めた。Western 群では脂質、不飽和脂肪酸、リボフラビン、アルコールと正の、炭水化物、コバラミン、食物繊維と負の関連を認めた。Alcohol 群では蛋白、不飽和脂肪酸、アルコールなどと正の、炭水化物、脂質、不飽和脂肪酸、食物繊維などと負の関連があった。そして CES-D 得点 16 点以上の対象者と IBS 群との間に有意な相関を認めた ($P=0.01$)。さらに食事パターンと IBS との間では、Alcohol 群得点高値と IBS リスク減少との関連性を認めた ($P=0.024$)。つまりアルコールおよびつまみ類を多く摂取する食事パターンは IBS のリスクを減少することを明らかにした。 本研究は、IBS と食生活および抑うつ症状の関連に焦点をあて、食事パターンと IBS のリスクに対して新しい知見を見出したので、学位授与に値する。	
公表雑誌等名	Internal Medicine (2015 年 12 月 15 日 ; No. 24)